

Prof. A. Hillの 細胞生物学的日常

Episode 7

月 日、名前が思い出せない。ほら、最近お笑い芸人と生田神社で結婚式をあげた、あの芸能人、ほれほれ、身体の凹凸の激しい、ふ、ふがつく、結婚相手のほうは、名前が言える、……、あれ?あ、名前なんだっけ、いまさっきまで喉元まででかけてたのに、うううううううう。今回は、このシリーズ始まって以来初めてのシリアスな問題を取り上げる。物忘れ。シリアスです。あの先生、自分じゃ笑い話のつもりであんなこと書いていたけど、その後若年性アルツハイマーって診断されて、可哀想に…ってことが十分予想される命がけのエッセイである。「明日への記憶」と紙一重の恐怖と闘い続ける日々を報告したい。



この格好はいったいぜんたい…

若い頃から、ひどかった。どうでもいいことは細かく思い出せるのに、大事なこと、特にヒトの名前が出てこない。それがagingにより磨きがかかり、今や達人の域に達している。某Hi先生(この方の名前はちゃんと出てくるが、あって伏せているのです。念のため言っておこう)が、某Sa学会機関誌の巻頭言で、相貌失認バリアフリーの提言をされていた。なんだか、かっこいいけど、要するにこの先生は顔を見分けられないんですね。「見覚えがあるが名前が思い出せないのでなくて、見覚えがない。顔が認知できないだけで、名前がわかれればその人物は記憶しているし、見覚えて一度意識に定着した認証済みの顔は忘れない」そうです。昔、精神科医が実際にあった症例を紹介した「妻を帽子と間違えた男」という本があったが、この先生の場合はもしそんなことをしたら命が危う

い。理由は言わないが深く同情します。



若年性アルツハイマー病を取り上げた映画
「明日への記憶」。怖くて見ていません。

それはともかく、私はこの先生よりは進化している。すなわち、顔は忘れない。とてもよく憶えている。ところが名前が出てこない(知っているはずなのに)、そして名前が出てこないと、芸能人等は別として、バックグラウンドも思い出せない。これは、完全に何も思い出せないより、窮屈に陥りやすい。相手の顔はよくしってるので、向こうから挨拶されるとやあやあ久しぶりっていう顔をしてしまい(本当にそうだから)、相手は安心してしゃべり始める。ところが私の方は、話を合わせながら心の中で「誰だっけ、誰だっけ、どこのヒトだっけ、顔はよく知ってるから知り合いのはず」とせわしく頭を働かせている。上の空だ。でも必死で話を合わせる(具体的な話は避け、なるべく形而上の会話を持ち込む)。ひどい場合は、会話が終わっても思い出せない。30分話して、とうとう思い出せなかったこともある。不幸にも思い出していないことが途中でばれると、相手はええーっと落胆し、悲憤慷慨する。この前一晩中飲み明かしたじゃないですか、なのに…ほんとうに失礼である。逆の立場だったら怒り心頭である(身勝手だ)。今も、朝通勤途中でよく会う方の氏素性が思い出せない。毎日のように会うが思い出せない。むこうはよく憶えていて(同業、らしい…)、最初立ち話をし、その後も挨拶してくださるので私もするが、どこのどなたか思い出せない(これを読まれている可能性も大きい。ごめんなさい、まだ思い出せません…).同じ業界に長くいるので、知り合いは増える。なのに「名前出てこない症候群」は逆にエスカレートしている。まずい。なお症候群は大変公平にできていて、目下も目上も無差別。学生であろうが偉い大先生であろうが、出てこないとときは出てこない(開き直ってるな)。そのうち、自分の研究室の人間の名前がでてこず、当人に「おい、そこの君」とよびかけるという、○○教授や△△教授(えーと名前が出てこない…にしておこう)が披露された神技を会得できる日も来るであろう…。

私も研究者の端くれなので、この症候群を分析してみた。特徴(1)は、脳に顔貌の情報が入力(相対する場合はもちろん、芸能人の話をしていてまず顔が思い浮かぶなども)されたとたん、名前の記憶浮上の回路がシャットアウトされることだ。何も見ず心の中で思い出す作業の場合は、名前が先に出てくればしめたものなのだ。ところが顔貌情報は私の場合とても刷り込みが強いので、なかなかそうならない。以前、よく知っている顔の中年女性と道でそれ違ったが思案しても名前が出てこず、その後、その人は駅のキオスクのおばちゃんであったことが判明した。しかも私はその駅にたまにしか行かず、もちろんおばちゃんの名前も知らない。この顔をよく憶える能力はある意味特技に近い。かつて田中角栄氏は、自分の選挙区の名も無き人々の顔や名前や職業を驚くべき記憶力で憶えていて相手を感動させたという。政治家として大事な資質であるが、私の場合は、顔は憶えていても付随する情報が完全に欠落するので(名前が出来ばそれから色々思い出せる場合が多い。特徴(2))、前述のように百害あって一利無し、とうてい政治家にはなれない。



右がゲベルツトラミネールですが、私には他の葡萄と区別がつきません。

近年、症候群は名前に留まらない進行ぶりを見せていく。何もかも思い出せない。顔すら思い出せることもある。いや、全てというのは間違いで、どうでもいいことは妙に思い出せる。デュラムセモリナ粉とかゲベルツトラミネールとか、すぐ出てくる。つまり、特徴(3)は何の役にも立たないことほど、即座に思い出せるという点。オランダにはスケヴェニンゲンという街があるとか、コバルトは原作ではアトムの弟だがアニメでは兄、などなど。一方大事なこと、例えばつい最近聞いた学生の実験結果、教授会での決定事項(これは寝ているため、はなから記憶していないという問題もある)、たんぱく質の名前(たんぱく質の番号や数字は論外。開き直ってるな)、結婚記念日、などはことごとく記憶庫からの浮上が遮断される。忘れたら致死的と思われるものも含まれているが、配偶者も同病となりつつあり、「これこれはこうこうだったんだって」「へーそれはなんとかだねえ」という何気ない夫婦の会話を、息子に、まったく同じやりとりを数日前に聞いたと呆れられるに及び、まあ理解は得られるであろう。仕

事では、昨年大きな国際学会の講演において、2つの質問を一度にした人に対し、私はまず第1の質問に答えようとしたが思い出せず聞き直し、それに答え終わって第2の質問に答えようとするも今度はそっちもアウトで絶句するという失態を演じた(こういうときは、第1の質問は聞き流し、直近の第2の質問にのみ意識を集中し、答えた後に第1の質問は何であったかと聞けばあまり目立たないのだが、私はこのとき何故か全部憶えられるという理由不明の自信を持っていたのが災いした)。このような人間が本特定領域の計画班員でよろしいのか、という声もあがつたらしいが、本人は一度に二つも質問する方が悪いとしか思っていない(明らかに開き直っている)。



スケヴェニンゲン。ハーグに近く綺麗なホテルがある。なお、ニューカレドニアの近くには、エロマング島という美しい島があります。

今朝読んだ新聞に、単なる物忘れと認知症による物忘れの違いを見分けるための質問が並んでいた。曰く、その日のことを思い出せないのは認知症が疑われる云々。さすがに私も同じ日のことは憶えているが、他にどのような質問の項目があったかというと、あれ?……。あ、これがやばいのか…やはり病気か。うーむ。私も、かの数学者のごとく上着の袖や胸に大事なことを書いたメモをぶら下げなくてならぬか(最後の図のレジェンド参照)。前述のHi先生は、学会に於ける相貌失認バリアフリーを提唱されている。対策の中に「名札は5メートル先から名前が読める大きなものだと助かる(くれぐれも裏返しにしない)。あるいは両面に名



コバルト。ちょっとさえない。

前を)。」というのがあり、これは我が症候群にも有効だ。私は某Sa学会の将来計画委員会の委員長だし、Hi先生も委員だから、まずこの学会でバリアフリーを実現しようと。それまでは、学会などで私があなたとお会いした折に、私の目が虚ろになって天候の話や実存主義の話を始めたら、あなたが誰か思い出せていないということですので、さりげなく会話の中にあなたの名前を出してください。何卒よろしくお願い申し上げます。



小川洋子の小説「博士の愛した数式」の主人公である数学者は、記憶が80分しか持たない。私の記憶は、場合によつては90分以上持つ。彼は交通事故の後遺症でそうなったが、私は天然。この本は映画化された。先に原作を読んでいたのでストーリーにやや不満が残ったが、四季の移ろいが美しくなかなか佳作であった。ルビーの指輪を歌っていたへなちょこに一ちゃんも今じゃ立派な俳優です。